

郷土を知り育む生涯学習システムの構築 ～世界遺産教育を通してESDからSDGsへ～

2021年08月26日

はじめに

“寒川町総合計画 2040”では、SDGs(持続可能な開発目標)について、『世界共通の目標であるSDGsにより、世界共通言語を持つことが可能となることから、住民、企業、他市町村などと目標を共有し、合理的な連携を促進することが求められる』としています。

また、学び・教育について、学びでは、『自立と共生を目指して、よりよく生きるために、生涯を通じて学ぶことができる場づくりをする…』とあり、教育では、『核家族化、少子高齢化、国際化、高度情報化などの状況変化が進み、子どもたちを取り巻く環境は急速に変化する状況の中で、本町の教育理念である「よく学び、よく遊び、よく生きる」を実現させる』とあります。

そして、新たなまちの将来像「つながる力で 新化するまち」を目指しています。

ご存じのようにSDGsは、持続可能な世界を実現するための17の目標と169のターゲットからなり、“寒川町におけるSDGsの推進(実施計画)”では、“寒川町総合計画 2040”を実施することはSDGsを達成することに大きく寄与する、としています。

質の高い教育の提供に関するSDGsの目標4では、「教育が全てのSDGsの基礎」であり、「全てのSDGsが教育に期待」している、とも言われています。特に、ESD(*1)(持続可能な開発のための教育)は持続可能な社会の担い手づくりを通じて、17全ての目標の達成に貢献する重要な目標と位置づけ、このターゲット4.7(*2)にESDが組み込まれています。

ESDを通じて日頃の学習での取り組みを、SDGsの達成、そして持続可能な社会の構築につなげていく必要があります。

また、従来の教育は現代人の目線(立場)であり、未来から見て環境問題など持続可能でない現実があります。ESDは、未来に対して責任を持つ人格の育成を目指すものです。

*1 ESD 持続可能な開発のための教育(文部科学省<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>より)
今、世界には気候変動、生物多様性の喪失、資源の枯渇、貧困の拡大等人類の開発活動に起因する様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動です。つまり、ESDは持続可能な社会の創り手を育む教育です。

*2 ターゲット4.7

2030年までに、持続可能な開発のための教育及び持続可能なライフスタイル、人権、男女の平等、平和及び非暴力的文化の推進、グローバル・シチズンシップ、文化多様性と文化の持続可能な開発への貢献の理解の教育を通して、全ての学習者が、持続可能な開発を促進するために必要な知識及び技能を習得できるようにする。

1. 問題、課題

生涯学習を取り込んだ持続可能な地域社会実現のため、
寒川町の強みを生かした、郷土の文化学習プログラムはできないのでしょうか。

寒川町の強みは何でしょうか。

寒川町には日本有数の縄文集落跡である岡田遺跡(*3)があり、特異な形状を持つ釣手土器が出土しています。釣手土器は祭祀に使用されたとされ、ひとつの遺跡から複数出土することは異例なことです。

町境にある国指定・史跡(記念物)である下寺尾官衙遺跡群は、官衙遺跡群の構造や立地など全体像が把握できる重要な遺跡です。

県指定・無形民俗文化財の浜降祭は、早朝、茅ヶ崎市の西浜海岸に寒川神社をはじめ各神社から神輿が集まり禊ぎを行う浜降りの祭祀儀礼です。

このような全国的にも珍しい寒川町の縄文文化を始めとする史跡や文化財は、寒川町の強みであり町の文化です。

*3 2021年7月に行われた第44回世界遺産委員会で、日本の文化遺産としては20番目となる、縄文時代の三内丸山遺跡が世界遺産リストに記載されました。

寒川町には、これに匹敵する日本最大級の縄文集落、岡田遺跡があります。

2. 改善案

郷土の文化学習プログラム実現のため、

『郷土を知り育む生涯学習システムの構築』(講師陣の充実、指導者・育成の仕組み作り)
を提案します。

改善案について、以下に記します。

【郷土を知り育む生涯学習システムの構築】

目的:

寒川町の歴史・文化を世界遺産教育を基礎とした生涯学習を通して、持続可能な地域社会を実現するとともに、寒川に住み、寒川を誇らしげに語れる住民を育もう!

目標:

- ・寒川町の歴史・文化を体系的に学べる郷土の文化学習プログラムの構築
- ・文化学習プログラムを推進するリーダー(講師)の育成

方針:

- ・運営するためのルール作り
- ・指導者・育成の仕組み作り
- ・世界遺産を通してのESD教育の実現(*4)
- ・講師陣の充実(縄文文化、史跡や文化財、郷土史家)

着目点:

- ・読本を通しての学習やインターネットなどの調べ学習では学ぶことができない生きた知識を伝える
- ・伝統的な祭りに参加することや、生活の中で町内の文化財に触れる機会を設ける
- ・歴史的背景や現在に至る経過、保存や継承のための取組みが分かる
- ・他地域から移り住んできた人も、町内の文化財や年中行事を理解し参加できる

***4 世界遺産を通してのESD教育の実現**

問題、課題の解決にむけて、基礎知識習得の具体的手段として世界遺産教育(*5)を例に説明します。世界遺産を通しての教育では、次のような世界遺産教育からみたESDとの共通点があります。

(1) 世界遺産は人類共通の宝物

世界遺産は、現代人のみならず将来の人々のものです。世界遺産条約では世界遺産を保護・保存し、整備し、将来世代へ伝えることが締約国の義務となっています。

この保護・保存を通じて、豊かな国と貧しい国の経済格差(南北問題)や開発途上国の貧困など、さまざまな課題を学ぶことができます。

(2) 世界遺産は、文化の多様性を象徴

世界遺産は特定の地域や国、特定の文明や文化に偏在しません。

世界遺産の多くはそこで住民が生活する「生きている遺産」で、地域社会そのものでもあります。

(3) 世界遺産の維持は、環境や平和、国際理解の課題に直結

世界遺産は、自然災害、開発、紛争、密猟、保護管理の不備等によって、危機遺産リストに登録されます。登録された危機遺産を脱するために、どのような対策ができるかを学びます。

また奴隷貿易や人種差別、戦争の悲惨さを後世に伝える負の遺産があり、平和について学びます。

世界遺産を通してのESD教育の実現 概念図

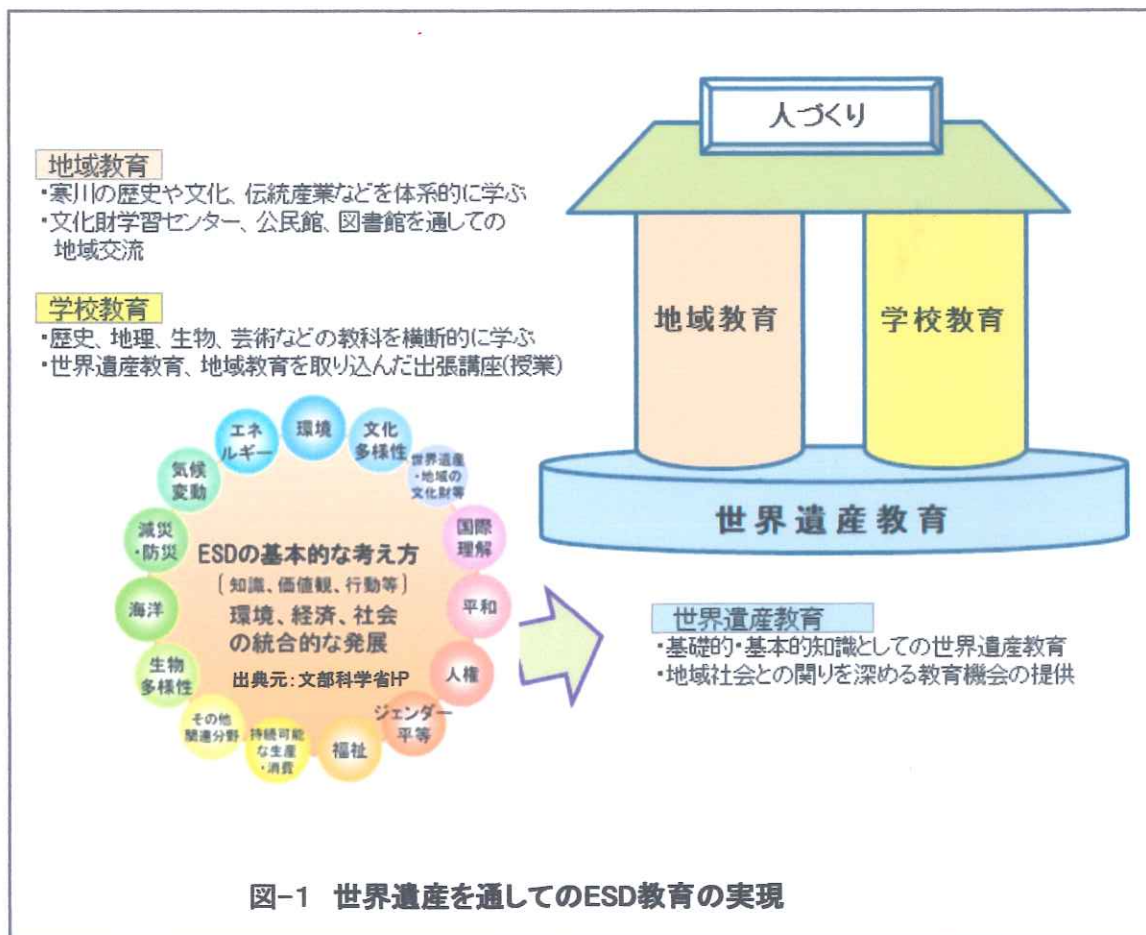


図-1 世界遺産を通してのESD教育の実現

生涯学習を通して持続可能な地域社会の実現
生涯学習システム 概念図

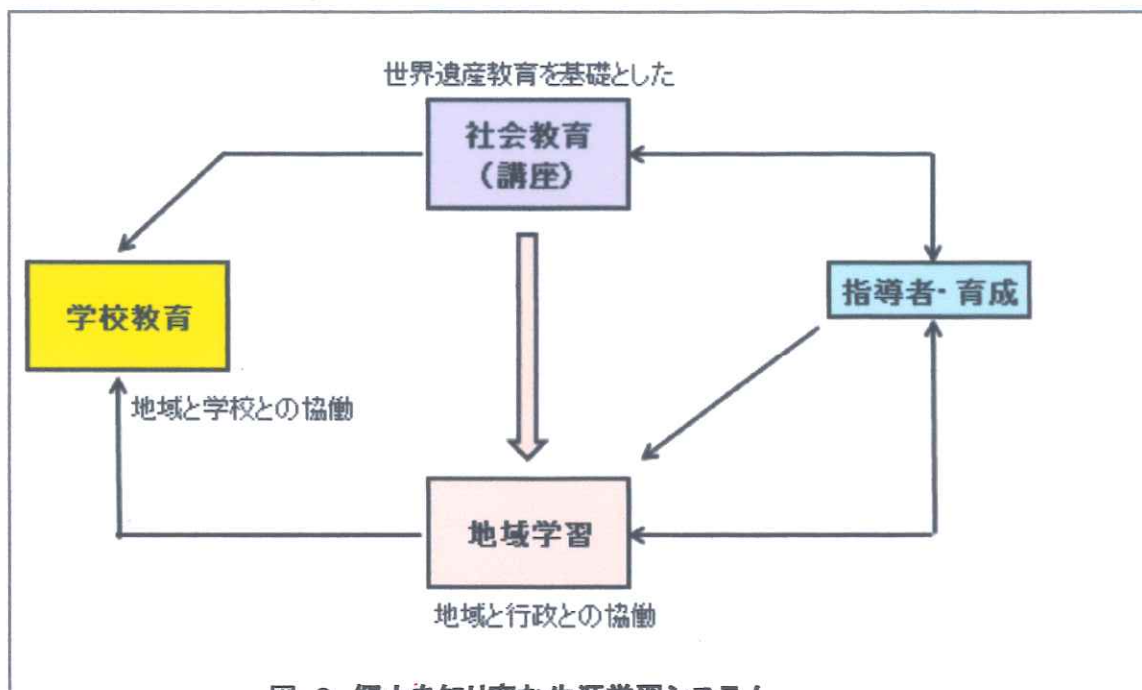


図-2 郷土を知り育む生涯学習システム

社会教育： 講座による心豊かな生きがいがづくり、学習意欲の高揚

地域学習： 学んだ知識を地域に還元→家庭、地域社会における先生

学校教育： (小・中学校)外部講師による講演

→講師は社会教育のみならず学校教育へも活用する

郷土の歴史、文化財への興味 / 修学旅行で訪れる世界遺産の事前学習

指導者・育成： 指導者を育成、活用するシステム(受講者から指導者へ)

講座で学んだ知識を自らが講師となって地域へ還元する仕組み作り

講座参加者は、学習した知識を受け手から発信者として地域に還元できる

*5 問題解決のため、なぜ、世界遺産を学ぶのか？

それは多角的な視点から学習することができるからです。世界遺産の課題は、様々な分野に関わっているため、教材も地理、歴史、外国語、美術、生物等の多くの授業科目で活用が可能であり、また教材は、学校ばかりでなく、社会教育やそれ以外の利害関係者にも有益なものとなります。

世界遺産教育は、世界遺産そのものについて学ぶだけでなく、世界遺産の価値に気づき、大切に保存しようとする態度、未来に伝える義務があるという責任感、そのために何ができるかという実践的な行動などを学習する総合教育です。地域に伝わる伝統文化や文化財などを通して、それらを尊重する態度や地域を誇りに思う心情を養うことに結びつきます。

世界遺産の保存に深く関係する観光・環境・平和などと世界遺産との関係について多様な学習へと展開することができることから、現代的な諸課題に対応し持続可能な社会の担い手を育てるための教育ともいえます。

世界遺産はSDGs目標11「住み続けられるまちづくりを」の、ターゲット11.4「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」に該当します。

3. 改善後の効果

我が寒川町では、社会教育として多くの講座が開催されています。しかしながらこれらは単発で開催され、しかも講師からの一方通行です。寒川町の強みを生かした、郷土を知り育む生涯学習システムが機能すれば、生涯学習を通して持続可能な地域社会が実現し、新たなまちの将来像「つながる力で 新化するまち」を基軸とした、世界遺産教育(環境・国際理解・平和・人権)→地域教育(歴史・文化)→学校教育というように発展的に体系づけることができます。

ESDの推進により、地域の多くの人々が世代を超えて、ともに学び、そのプロセス自体を楽しみながら、連携・協働するという「自発的な推進力」が持続可能な地域社会を実現することでしょう。持続可能な地域社会の実現が進み町民の関わりが深まれば、一層地域的な広がりを持った生涯教育が進展すると思われれます。

なにより強調したいのは、世界遺産が無い地域でも世界遺産教育は可能なことです。世界遺産に登録されていなくても、優れた文化財や美しい自然環境はどの地域にも存在しており、地元の文化財や自然景観を例として、それらの価値に気づかせ、新たなまちの将来像「つながる力で 新化するまち」を育むことができます。

おわりに

現在実施されている講座は、単発で講師からの一方的な学びです。町の歴史や文化、現状をパラバラに知るのではなく、一貫した流れを持って学び、将来を目指せないだろうか？そんな思いがありました。

今回は世界遺産教育を例に提案しましたが、別の切り口で実現可能であるならば、生涯学習を通して持続可能な地域社会教育の実現に向けて、より良い方法での実施を切に希望します。

実現に向けて、出来ない理由を探すより、できることをひとつでも広げて頂ければ、と思います。

回答

<郷土を知り育む生涯学習システムの構築> 【所管：教育政策課】

今回は貴重なご提案ありがとうございます。現在教育委員会では様々な歴史・文化財、郷土文化に関する事業を展開しております。おかげさまで多くの方に関心をもっていただき、概ね好評で定員に達している事業が多い状況です。また、世界遺産関連の講座も南部公民館の講座として実施しております。

しかしながら、ご指摘のとおり一部をのぞき、各事業が実施主体である各公民館、文化財学習センター、教育政策課にてそれぞれ独自で実施されている状況があります。

このことにつきまして、来年度事業においては、それぞれの主体だけで企画していくのではなく、寒川町総合計画 2040 及び教育振興基本計画に沿い、郷土文化の学習といった目標に向け各事業の内容をプランニングできるよう現在考えております。また世界遺産の学習についても、文化財愛護精神を育む貴重なコンテンツとして今後も取り組んでいきたいと考えております。

これらを通し、さらなる歴史・文化財、郷土文化の学習について充実を図っていきたいと考えておりますので、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。